

情報技術の

PROFESSIONAL
第59回

Webアプリケーション・サーバーの匠^{たくみ}

匠

背骨は、変わらない。

「趣味は?」という問いに樽澤は「多趣味で雑食です(笑)」

と答える。

「映画鑑賞、ジョギング、自転車。最近はあまりできていませんけれど、ゴルフ、スキーとスノーボード、楽器演奏。今はもっぱらミュージカル鑑賞ですね」

趣味だけではなく、仕事でのキャリアとロール(役割)も多彩。入社以来、さまざまな業務を担ってきた。しかし、そのどちらにも、常に変わらない「背骨」がある。だから続けられ、楽しめた。仕事において、樽澤の背骨は「プログラミング」だった。



樽澤 広亨 (たるさわ ひろゆき)

日本アイ・ビー・エム株式会社
システム・テクニカル・サポート・サービス
STSS オープン・テクノロジー技術推進

【プロフィール】

1988年入社。お客様担当SE、技術支援スペシャリストを経て、2006年には米国IBMのWebSphere開発研究所にて開発エンジニアを担当。その間、金融機関向けJavaフレームワーク開発にかかわり、アーキテクト、製品・技術スペシャリストとしても多くのプロジェクトを担当。海外を含む講演、社外執筆などの活動に精力的に取り組む。

製品の研究、開発、テクニカル・セールス、デリバリー・プロジェクトのチーム・リーダー、マーケティング。講演活動に各種媒体への執筆、寄稿。そして現在は、技術支援を担う。後方でのバックアップと同時にお客様の問題解決に向けて最前線にも立つ。

こうした「多彩なキャリア」という歩みの中で、幾つかの分岐点があった。

「まず、営業に進むのか、エンジニアを続けていくのか、という分岐点。その次には、このままスペシャリストとして磨きをかけてい

くのか、ライン・マネージャーとして、人を導く立場になるのか…」

悩みながらも、結果、常にエンジニアとしての道を選んできた。その理由は「技術者としてプログラミングにかかわるのが純粋に好きなんです」この1点だった。

管理職として人を導く仕事の価値にも魅力を感じていた。だが、やれるか、やれないかではなく、結局は好きなことを軸にすることを選んだ。

「譲れないことは首尾一貫してありました。研究開発にしても、売るにしても、構築するにしても、プログラムにはかかわる。入社して24年。振り返ってみると、プログラムを書き続けてきました」

いろいろな役割を担い、そのたびに苦しい思いはしてきたけれど、プログラミングという武器と、「好き」という気持ちが支えてくれた。技術者としての譲りたくない背骨があって続けてきた。

モノを売るのが好きな人であれば、どんな部門に移ったとしても、「お客様の笑顔を見るのが好き」という1点を背骨にすればいい。自分が何かを続けるための背骨。それはプライドであり、プロ

フェッショナルとしての誰にも負けない技術。



セパレーション・オブ・コンサーン (Separation of Concern)。ソフトウェア・テクノロジーの1つの概念で、「関心事の分離」という意味だ。樽澤は14年前、Webアプリケーション・サーバーを手掛け始めたときにこの概念と出会った。

「あるプログラムを1つのプログラムで書くのではなく機能点を分割して書く。例えばGUIの部分、データベースにアクセスする部分、この2つをつないで制御する部分と分けて作ることでメリットを得られるという考え方です」

共同作業ができる、問題の原因が特定しやすくなる、修正がしやすくなるなどのメリットに加え、技術者にとって大きなメリットがあると樽澤は指摘する。

「GUIを担当する人であれば、GUIの開発に集中できるので、GUI自体がどんどん洗練されていく。データ・アクセスの専門家はどんどん速いアクセスを実現することができる。それぞれのプロフェッショナルになっていくことができます」

この概念を樽澤は自分の仕事への取り組みにまで広げている。要は「切り分けて考えて、物事を進めていく」「今の自分の役割に徹する」ということだ。

「例えば相手に合わせて、見せるべきコンテンツや切り口を変えていく。CEOの方々にわれわれ技

術者が分厚い技術資料をお持ちしたとしても意味がない。CEOが知りたいことは『採用したら来年のビジネスはどれくらい伸びるんだ?』ということなのですから」

システムの責任者を相手にすれば、ビジネス上の問題を解決するための具体的な筋道を、技術者同士であれば、ディテールに踏み込んで、資料をそろえ、話し合いを持つ。

「若いころは、IBMというのは最善のサービスを目標としているんだから、『ディテールを満載した資料の量で勝負!』という感じでした(苦笑)」

組織やプロジェクトの運営から、人と人との会話の押し引きまで。14年前、セパレーション・オブ・コンサーンという概念を自分自身に適用することによって、状況を踏まえ、自分の技術や考え方ばかりに固執するエンジニアから脱皮したともいえる。

組織や業務における、自身のプロフェッショナルとしての役割。そして、それを楽しむためのよりどころ。「プログラミングが好き」という自分の背骨を大切にしながら、多彩な業務、役割に挑戦していく。現在、力を入れているのは、IBM PureApplication System (以下、PureApplication System)の技術支援と新たなオファリングの検討。

「わたしにとっては、1つの解になるかもしれませんが。プログラマーは、プログラミング以外にも、ハードウェア環境のセットアップや運用段階でも多くの時間を割いていま

す。PureApplication Systemを活用すれば、短時間でハードウェア環境を構築できる。これはお客様の観点に立てば開発期間の短縮、運用時の負荷の軽減などにつながりますし、プログラマーは開発に集中できるので、共にハッピー。このソリューションの普及に貢献していきたいと思います」



樽澤の音楽遍歴は、小学校でのクラシック、吹奏楽に始まり、中学に入ってからFMのエアチェックで、ジャズ、フュージョンを聴く毎日。パンクやニューウェーブにレゲエもかじり、今、オフの楽しみはブロードウェー・ミュージカル。

「きっかけは、子どもと一緒に見た、東京ディズニーシーのミュージカル仕立てのショー。ジャズやブルースの要素があってそこにダンスがある。終わるとみんなでスタンディング・オベーション。今までいろいろな音楽を聴いてきたけれど、昔からこのアメリカ文化的な感じが好きなんだなあ、ということに気が付きました」

クラシックを聴いていたころには興味を持てなかった、アメリカを代表する作曲家ガーシュイン。代表曲を散りばめたブロードウェー・ミュージカルのサウンドトラックが、今は樽澤が持ち歩くすべての音楽デバイスに入っているお気に入り。

仕事も趣味も、自分の背骨に気が付いたとき、情熱が高まり、もっと愛は深まっていく。